

平成20年度 校内研究の概要

1 今年度の研究の方向性について

(1) 昨年度からの課題

大きく4点あげられた。

- ①関わり合う必然性のある授業づくり ②関わり合う、ひびき合う姿のみとり
③話し合いでのスキルやマナーの積み重ね ④「関わり合い」「ひびき合い」についての共通理解
なお、④については、次のように共通理解し、以降の研究を進めていく。

関わり合い → **目に見える形。個と個、または個と集団に何らかの関わりが見られる状態。**

ひびき合い → **みんなで関わり合いながら、よりよいものを目指し、よりよいものを築き上げていくことができる姿（従来通り）**

より具体的な **子どもの姿としては**
目に見える、または見えないが、単元のねらいにより近づく心の変容。
変容とは、「強化」「変化」「統合」が、根拠をともなされてなされること。

(2) 研究の概要

テーマ「ひびき合う三の丸の子どもたち」

研究課題・・・自ら進んで学習に関わろうとする意欲や態度の育成

◎手だて・・・子どもの知的好奇心をもとに、子どもと教師で行う授業づくり

①研究課題と手だて設定の理由

今年度は、「子ども同士が関わり合う」ことは大前提として手だてからははずし、新たに子どもたちの知的好奇心から子どもと教師で行う授業（単元）づくりを手だてとした。

「授業をつくる」 → **友だちや教師との関わりを通して、必然性を持って問題発見・問題解決しながら学習が進む過程のこと。最終的には、単元のねらいを達成する**
「単元をつくる」

②研究仮説

子どもと共に「授業をつくる」「単元をつくる」ことを通して、その過程でひびき合いが見られるだろう

③研究方法（具体的な方法は後述）

一人年一回研究授業（技能教科、総合以外の5教科）、実践レポート報告会

2 具体的な研究方法

(1) 授業のありかた

①教師の与えた教材が知的好奇心を喚起し、徐々に子どものものとなる学習

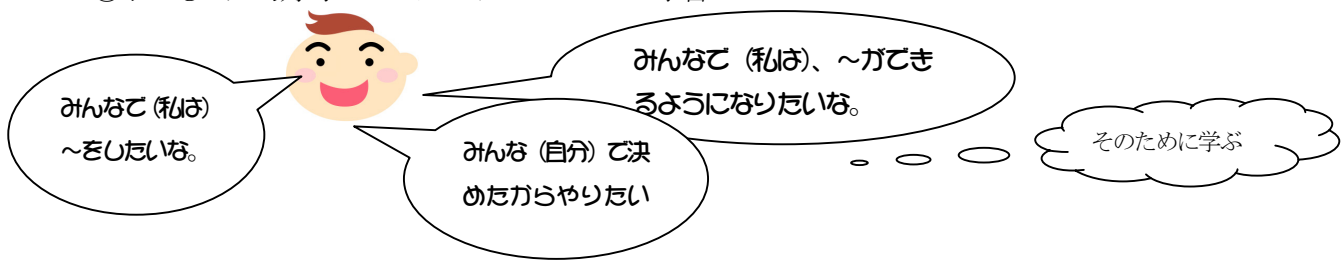
おもひろそうだから、やってみたい



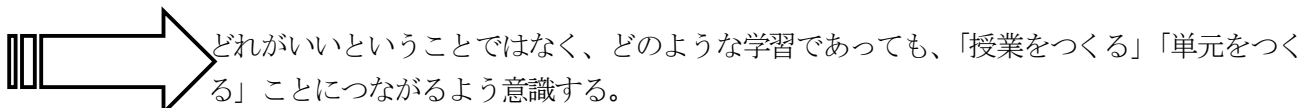
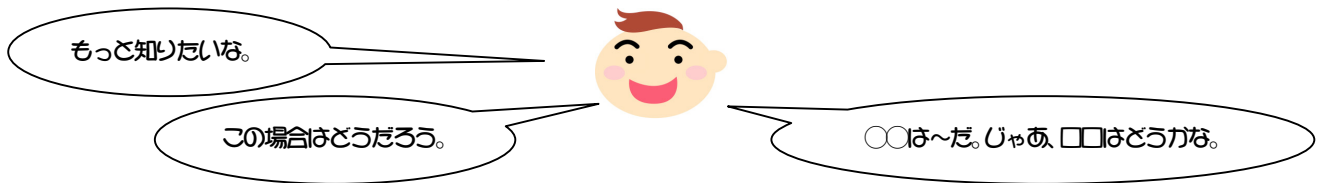
やってみたらよかった。もっとやりたい。

「先生が言ったことをやる」から「自分がやりたいから学ぶ」

②子どもの知的好奇心がスタートかつゴールの学習



③子どもの知的好奇心が発展していく学習



どれがいいということではなく、どのような学習であっても、「授業をつくる」「単元をつくる」ことにつながるよう意識する。

また、そのために教師は教材研究や教材開発を行う。教師・子ども・地域の個性を生かす。

(2) 授業形態

様々な場面で、その時に一番子どもたちが必然性を感じられるように教師が意図的に組み込む。

(例) クラス集団、グループ、ペア、プレゼンテーション、ポスターセッションなど・・・

(3) 授業研究について

①研究する教科、条件

- ・技能教科総合以外の5教科。技能教科は実践レポート報告会で。
- ・導入はなし→授業をつくる、単元をつくるというところが見えにくいから。(個学は実態に応じて)
- ・活動のみの研究授業にはしない→活動によって子どもたちがどのように変容したかを見たいから。

②研究授業を行う時の留意点

- その一時間だけでなく、単元を通して、子どもたちが友だちや教師とどのように関わり合いながら、単元目標に達していくのが大切。ひびき合いが見られるだろうところを研究授業として行う。
- 始めにたてた単元指導計画通りにいなくてもよい。あくまでもそれは計画。子どもたちの持った課題や思考の流れによっては、途中で変更もあり得る。

③授業研究の視点

○教材が子どもの実態にあっていたかどうか。

○ひびき合いが見られたかどうか。

「個」・・・授業者が特に見てほしい数人の子どもを事前にピックアップし、その子のひびき合う姿を見る。

「全体」・・・授業全体を通して子どもたちがひびき合っていたかどうか。参観者のから見てどうだったか。

・見られなかったとしたら、どこに問題があったのか。

・見られたとしたら、どこがよかったのか。

教材そのもの？学習課題？発問？教師のでどころは子どもたちが十分思考錯誤した後だった？早すぎず、遅すぎずだった？ねらいからずれすぎた時だった？・・・などなど

(4) 実践レポート報告会 (年4回)

- ・6月上旬・・・学級経営について
- ・8月・・・夏休み前までに実践したこと。レポート報告会。
- ・12月・・・冬休み前までに実践したこと。レポート報告会。
- ・2月・・・学級経営について報告